
俺と彼女と夢物語

もみじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女と夢物語

【Nコード】

N0499W

【作者名】

もみじ

【あらすじ】

恋愛小説を書いてみようかな・・・と思いチャレンジ

特殊な主人公がその”特殊”を隠しながら育んでく恋物語です
過度な期待はしないで見てやってください

それと不定期更新です

せめて三日に一回更新できればいいかな

都会へ行こう（前書き）

D・Cのような感じの作品をかければなあ・・・と思って出した

この能力・・・

都会へ行くころ

俺には幼いころから人とは違う能力があった

いつごろからこの能力があったのかは忘れた

でもたぶんあのころだろう・・・

幼馴染の引越し、自動車の事故、両親の死・・・

あの一気に色々なモノを失ったとき

俺はこの能力に会えたのかもしれない

この能力は俺を助けてくれたけど

俺から大切なものを奪っていった

俺の能力・・・それは

「人の心が読める」

能力に気づいたときは些細なものだったと思う

おぼろげな記憶を読み返してみれば

たしか両親が事故で死に、俺が落ち込んでいた時に飼っていた猫がしゃべったと錯覚したのが始まりだったと思う

しかし、それは俺から人を遠ざける始まりでもあった

子供は無知で残酷だ

自分に理解できないものは全て淘汰する

まあ、ありがちな話だよ

俺の猫はしゃべるといって みんなは「嘘だ」とはしゃぎたて

俺には聞こえるのに みんなには聞こえないと分かると 「化け物」とはしゃぎたてる

そしてみんなは離れていき

俺はふさぎ込む

そして人が信じられなくなって 俺のそばにいてくれた友達も「同情だ」と言って疎遠にして

さらに能力が強化されていく

そこから俺の地獄は始まった

聞きたくもない人の心の闇が俺に流れ込んでくる

閉じこもっても木の声が聞こえてきたり 鳥の声が聞こえてきたり

酷い時には家の前を通る人の心の声まで流れてくる

親戚には「精神病」とか「不気味な子」などと言われ たらいまわしにされ

最終的には親の遺産を持って 孤児院へ

さすがの親戚も金のために不気味な子を飼いたくはなかったんだろ
うよ

そして孤児院に入っても俺は浮いたまま

俺は人と触れ合うのが怖くて 一人になり

孤児院仲間は俺が嘘つきだと囃し立て

孤児院の教員は俺に近づこうともしない

俺の心はもう壊れてもおかしくはなかった

いや、もう壊れていたのだろう

だけど・・・

だけど神父さんだけは違った

あの人は俺の話を真意に聞いてくれて

しかも相談に乗ってくれた

神父さんは心の中も同じことを言っていたから本当に救われたよ

そして神父さんは俺の心を鍛えてくれた

周りから奇異の視線に耐えられるように・・・

俺が周りの声を聴いても壊れないように・・・

そうして俺は孤児院のみんなに虐げられ、神父さんに助けられて育つて行った

そして今日

15歳になった俺は孤児院を卒業して都会で一人暮らしをする

小さいころから神父さんに頼み込んでバイトなどはさせてもらっていたし、親の遺産もある

ツテも一応あるし・・・向こうでの仕事も一応ある

能力も神父さんと一緒にがんばってコントロールできるようになった

つと・・・電車が駅についたようだな

俺は今までの思い出を胸にしまい、初めての都会に胸を踊らせながら改札口を出る

まさに絶好日とも言えるほどの快晴に俺は目を奪われながらつぶやく

「来たか・・・美坂町」

都会へ行こう（後書き）

心を読めるってヒロインには多いけど主人公には少ないよね

まあ、恋愛としてすぐ終わっちゃうからだろうけど・・・

でもあえてそれにチャレンジしてみます

本庄 彰

年齢：15歳

容姿：右目の下にほくろがある

茶色が混ざった黒色の短髪

平均よりも背は低め

女顔

性格；

心が鍛えられてるので 多少の事には動じなくなってる
基本ツツコミキャラ？

深く考えると それにのめり込んで周りが見えなくなるときがある
女顔に泣きばくろ、さらに守ってあげたくなるオーラがどこからか
出てるので（この文は彰により、削除されました。御了承ください。
）

心を鍛えた今も人と触れ合うのに臆病ではあるけど
人と触れ合いたくない と思ってるわけではない

お金持ちじゃないっすか！（前書き）

そついや これ

設定とかプロットとか何も考えてないんだよね

とりあえず不定期更新でグダグダと書きますけど・・・

お金持ちじゃないっすか！

絵に描いたような快晴を目にした俺は 大きく息を吸う

「うつ・・・ケホツケホツ・・・うー・・・吸い過ぎた・・・」

ふう・・・それにしても都会の空気はまずいとはよく言うけど あんまりわからないな

ここに慣れてから 故郷に戻れば わかるかな？

故郷は自然が取り柄みたいなものだったし・・・

「おい、邪魔だぞぉー」

「わっ、ととっ・・・すみませーん」

いつまでも駅の入り口にいるもんじゃないな 怒られちゃった

とりあえず愛想笑いしながら 謝るけど・・・

うん、神父さん・・・わかってるよ 「笑顔は物事を円滑にする」・・・だよね！

とりあえず由紀弥さんのところに行かなくちゃ・・・

俺が都会に来た理由・・・それは色々あるけど 一番の理由是由紀

弥さんだ

由紀弥さんは今の俺の保護者でもある人だ

母さんの親友らしいけど・・・年は不明

由紀弥さんは性格的には難がある人だけど 心はとても清らかな人だ

当時の俺は人から離れてたから 由紀弥さんを邪険にしていたんだけど

その時から 由紀弥さんは俺の保護者になるつもりだったらしい

俺が孤児院に入ってふさぎ込んでるときもちよく様子を見に来てたらしいんだ

俺が神父さんに心を鍛えてもらってるときに由紀弥さんと初めて会って・・・

由紀弥さんは俺の事を知ったら みんなと同じようにそうつ目でみるんだろつな・・・

そう思っていた

だけど由紀弥さんは黙って俺を抱きしめてくれて・・・俺を孤児院から引き取ることにしたんだ

でも、その時の俺はまだ小さいし 心が弱かったから 中学校を出たら・・・という事で引き取られるのは延期になった

でも由紀弥さんは時々孤児院までやってきては 俺と一緒にいてく

れて・・・

神父さんがいたから俺は救われて、由紀弥さんがいたから俺は立ち上がることができたんだと思う

そして中学校を卒業した俺は戸籍上では由紀弥さんの姓である本庄をもらって本庄 彰となっている

旧姓は三村だ まあ、今となつては 完全に吹っ切れたから 旧姓に愛着があるわけでもないが・・・

少しさみしく感じてるのかもしれない

そして俺こと本庄彰は由紀弥さんに頼まれて仕事の手伝いをするこ
とになり、その仕事場がある美坂町まで行くことになったわけだ

始めは由紀弥さんの家に一緒に住むことになっていたのだが「さすがに15で同棲はまずい」と告げると真っ赤になって怒っていた

でも心の声聞いちゃったんだよね・・・（女扱いしてくれてるんだ）
って・・・

それを聞いちゃったもんだから ますます意識しちゃって 俺は一人暮らしをすることにした

まあ、一人暮らしと言っても由紀弥さんの家の隣なだけどね

由紀弥さんは以外にお金持ちらしくて ここら一帯の土地を持っているらしい

それで由紀弥さんの家の隣に住むことになった

・・・そっぴや俺って由紀弥さんのこと全然知らないな

仕事も、年も・・・一応住所は教えてもらったから知ってるけど
どんな家なのかも知らない

もしかしたら結婚してるかもしれないし 子供もいるかもしれない
けど 心の声を聴いてる限りでは それはないだろう

あ、だからこそ 年のことは禁句なのかな

前、由紀弥さんに年を聞いたたら ヘッドロックかけられて そのま
ま意識を失ったことがあつたな

たしか心の声を聴いて 年を知ったはずんだけど・・・ヘッドロ
ックの衝撃で忘れてるみたいだ

つと・・・考え事したら 着いたな

「へえ・・・ここが由紀弥さんのいうえっ！」

な、なんじゃこりゃあ！でかい！すっごいでかい！

「えっ・・・ネームプレートネームプレート・・・本庄って
書いてある・・・」

はあ・・・由紀弥さんは昔から謎の多い人だとは思っていたけど
謎すぎるよ・・・

「とりあえず・・・インターホン・・・」

ピンポンというお決まりな音がなり、由紀弥さんが出る

「はい・・・あ、彰君ね　ちょっと待っててー　今開けるわ」

そう言うと同時にどでかい門が開く

「ほへえー・・・って！なんなんですか！遠隔操作できる門とか漫画の世界かと思ってましたよ！」

「うん？ああ・・・都会だからよ」

「都会だところなんですか！都会怖いですね！」

「そうそう　怖いのもう都会は　彰君なんてペロリと食べられちゃうわよ？」

「はあ・・・まったくこの人は・・・」

話を通じないんだもの・・・　その言葉は車の音にかき消された

「えっ・・・ええ！？な、なんで家に車！？ってか広っ！庭ひろっ！　庭だけで野球できるんじゃないですか！」

由紀弥さん・・・何者・・・？

その庭を走ってきた車から由紀弥さんが出てきた

「野球できるかもだけど　野球は駄目よ　庭師が怒るわ」

「いや・・・やりませんよ・・・って庭師！？庭師って言いました！？」

「あーもう・・・こんなところでしゃべってないで中入りましょ春と言ってもまだ寒いし」

「あ、そうですね 詳しい事は中で聞きます」

はあー・・・都会怖いなあ・・・
俺、やっていけるかなあ？

お金持ちじゃないっすか！（後書き）

とまあ・・・彰君に都会のイメージを誤解させてみました

よし、これからは出てきたキャラの説明をあとがきに書いていこう
ってことで1話には彰君の説明書いておこう

本庄 由紀弥

年齢：不明

容姿：なぜか彰が幼い時に会った時から姿が変わっていない

青い長髪のアート

長身

胸はCくらい

性格

天然が少し入ってるけど 基本的にサバサバしたい人
身内が困ると どうしても助けてあげたくなる

金を持っているという自覚はあっても金持ちという自覚はない
人情にもろかったりする

都会って・・・都会って・・・（前書き）

今回のタイトル書いたときに「都会って・・・とか言って・・・」
と変換されちゃって 笑いまくって しばらく再起不能でした

都会って・・・都会って・・・

あの後由紀弥さんの家に入った俺は家のでかさを改めて実感した
このでかさなら執事とかメイドとかいるんじゃないか！？とちよつ
と期待してたけど

「他人が家にいるのとかリラックスできないのよねー」と言っていた
以前、俺と一緒に住もうとしてたところから 俺を家族として見て
くれてるんだな・・・とわかったんだけど

それに気づいたら少し涙が出てきて 由紀弥さんにバレるのは恥ず
かしいから慌ててぬぐっていたり・・・

その後、応接室まで案内してもらって そのまま由紀弥さんに色々
美坂町について詳しく教えてもらった

駅のパンフレットに書いてあったりしたから それで少しは知って
いたけど

やっぱり住んでる人に話を聞くと色々な小話とかも聞ける

「怪奇！携帯電話のストラップに携帯電話を付ける少女」とか「美
坂町百八不思議」とか

正直これを聞いたときはツツコミしか出なかった

しかも由紀弥さんは不思議にも思っていないし・・・

「それくらいで驚いてちや都会で行けていけないわよ？」とか言わ
れたら「そうなんですか・・・」としか言えないし・・・
都会ってなんなんだろう・・・

あ、そうそうそのツツコミの時なんだけど

「なんすかソレ！携帯電話はストラップじゃないというかなんとい
うか・・・ああもうおかしすぎてツツコめない！」

「違うわよ 彰君 携帯電話はツッコむものじゃないわ」

とかいう由紀弥さんの意味不明な言葉とか

「108!? 108って多ッ! 普通7不思議じゃないんですか!？」

「私の不思議は百八式まであるわ」

などという電波な発言までもらって・・・

正直都会は俺には早いんじゃないかと不安になった・・・

でも神父さんに「いずれ彰には困難がぶつかってくるだろう しか
しそれから逃げてはいけない」

そう教えてもらっていたので 俺は頑張ることに決めた

美坂町のことを聞いたあとは由紀弥さんの仕事のこととか 俺の家の
こととか聞いた

由紀弥さんの仕事は諜報系とだけ教えてもらった

意味わからん・・・初め聞いたときなんか「長方形!? えっ 長方形
って・・・えっ? ええっ!？」などというお決まり? なこと言っ
ちやったし・・・

いやでもさ・・・「私の仕事? 諜報系よ」なんて言われたら10人
中8人は「長方形」って聞き間違えるんじゃないだろうか・・・
まず諜報系ってなにさ・・・

いやまあ、それでも諜報系ってのは納得できると思う

由紀弥さんが俺みたいなあまり取り柄のない少年に仕事を手伝ってほしいというなんて 俺の能力が便利だからだろう

諜報というのが何を目的にしているのかはわからないけど 人の心以外にも 木々や建物などの声も聴ける俺は便利だろう

正直 俺はこの能力がそんなに好きじゃないけど 役に立つというのなら俺は惜しまずにこの能力を使う

それに最近はコントロールがかなりうまくなってるから 条件を付けて 心の声を聞いたり 指向性をつけて 聞いたり などのこともできるから 負担なんてものもない

由紀弥さんはどこか俺にその仕事で頼みごとがあるのだろう
それでその頼みごとには俺の能力が関わってる・・・
つまり何かの心が知りたいのだろう

俺の能力は便利だ

例えば 人質を拷問することなく知りたいことを聞けたり
そこらへんの心の声を聞けば 人に会わずに潜入することもできる
だろう

それに 金庫の声を聞けばパスワードもわかる

・・・スパイになれるんじゃないか？俺

まあ、それでも不便なところはあるけどな

いっぺんにたくさん声を聞くと頭が痛くなるとか

相手の声を一方的に聞くだけなので 動物などしゃべれるというわけではないということか

まあ、故郷には人間の言葉を理解できるほど頭の良い犬がいて あいつとは喋れたけど・・・

あいつ元気にしてるかな・・・

ん・・・話が過ぎたな で、俺が言いたいのかと言うと

「いくら俺の力が便利でもその理屈はおかしいです由紀弥さん！」

「えー・・・でも、可愛いでしょ？この子」

「あ、はい・・・まあそれはわかりますけど・・・いや！だったらなおさらダメでしょ！由紀弥さんにも言いましたけど 同棲なんて！」

そう俺は困ってるのだ

由紀弥さんに仕事のことを聞いたあとに 由紀弥さんが何か閃いたような顔になって

俺が「あ、やべえ」と思った時にはもう 目の前に女の子が連れられてきていて

「この女の子 矢代真雪って言うんだけど なんか無口なのよねー っでことでよろしく！」

などという訳のわからない理屈で俺に丸投げされたんだ

「いいじゃない 彰君は無口な女の子を毒牙にかけるような鬼畜眼鏡じゃないんでしょ？」

「鬼畜でもないし眼鏡でもないですけど 間違いとか起こったらずるんですか！」

「役得でいいじゃない」

あ・・・駄目だこの人・・・マジでそう考えてやがる・・・
たぶん何言つても無駄なんだろうな・・・
はあ・・・俺の生活はどうなっていくんだろうな・・・
なんでこんなことになったんだろうな・・・

「都会だからよっ！」

「地の文を読むな！」

メタいことだけはやめてほしいよ まったく・・・

都会って・・・都会って・・・（後書き）

とりあえずどんどん人を追加させていかなーとなー・・・

矢代 真雪

年齢：15

容姿：いつも眠そうな顔

緑色の長髪

上の方で結んだポニーテール

胸はB

口リ体系

非力

性格：彰君が心を覗くのに嫌悪感を感じない

無口

でもそれはしゃべらないんじゃないって 其の表現のしかたを知らないだけ

割と興味心が旺盛で彰君の家ではしゃぎまわったり 探検気分て屋根裏部屋に入ったりする

ど、同棲開始・・・あ、でもその前に・・・（前書き）

あ、そういや言ってますねでしたが

タイトルは彰君ですね

例えば今回だと

彰「ど、同棲開始・・・あ、でもその前に・・・」

となります

まあ、気づいている人多そうですね　一応言っておきました

ど、同棲開始・・・あ、でもその前に・・・

「えっと・・・部屋とか・・・どうする？」

俺は今非常に困ってます

あの後、由紀弥さんに強引に押し切られて 真雪って子を引き取る
感じになったのだが・・・

「・・・・・・・・」

この子・・・しゃべらないです・・・

心を覗けば早いんだけど もし「うわー・・・こいつやべーよ マ
ジやべーよ 何こいつ？もうご主人様気分つてやつ？マジキモー」
などと思っているのなら 俺の精神は崩壊する

こんな可愛い子にそんなこと思われてたら・・・ゾクゾク・・・いや、
なんでもない

とりあえずそんなイメージがさつきから降って湧いてくるので心を
覗くか覗かないかで迷ってる・・・

由紀弥さんは多分 この子が無口だから俺に渡してきたんだろう
うまく対処してくれると思って・・・

でも俺には無理です！コミュ障ってわけじゃないけど 俺は人と触
れ合うのが苦手だったんだ！

今だって「厚かましいとか思っていないよね・・・？」とか考えちゃ
ってドキドキしながら真雪ちゃんの荷物整理してるんだ・・・

あうう・・・真雪ちゃんの視線を感じる・・・ああ・・・どうしよ
うどうしよう・・・

と、とりあえず！

「お、お風呂・・・沸いてるから　は、入ってきたら？」

なんか風呂覗きたい人っぽい事いつちやったー！あーやばいやばいやばい！

ど、どどどどうしよう！

「・・・・・・・・..うん」

お風呂入るってさ！

うん！もう頭混乱しちゃって・・・どうしたらいいの！？
神父さん！俺に教えてください！

「あ・・・・・・・・..着替え・・・・・・・・..」

「あつ・・・そつ、そうだったね　き、着替えね　由紀弥さんが言うにはこのダンボールに着替えが・・・ってひゃわあつ！？」

慌てながらも俺はダンボールを開けると　そこには下着が・・・
いわゆるパンティーとブラジャーと呼ばれるものが・・・
男の子の夢の塊が・・・

「下着・・・・・・・・..気になるの？」

「えっ、あつ　っや、そうじゃなくて・・・あ、そのっ、これ・・・
どうぞっ！」

謝れ　さっきの俺・・・今の俺は完璧にコミュ障だ・・・

とりあえず真雪ちゃんは 下着持ってお風呂行ったから これ以上の醜態は見せずに済んだけど・・・
どうしよう・・・？下着持っちゃったし・・・変な人って思われてないかな・・・？

あ、そういや下着持って・・・右手・・・
ちよっと嗅いでみようかな・・・どんな匂いが・・・

ってダメダメダメダメ！

何考えてんだ 俺のバカ！

今まで女の子とそんなに触れ合ったことがなかったからって！
さすがにそれはないだろう！

完全な変態に成り下がるぞ俺！

相手がいくら可愛いからって駄目だぞ俺！

気をしっかりもて俺！

ふう・・・神父さん・・・俺・・・心強くしたはずだね・・・
悪意とかそういうのに耐えられるようになったもんね・・・
なんでこんな以外な落とし穴があったんだろう・・・
あ、そうか 俺ってひきこもり体質だからだね・・・

「・・・何してるの？」

「ひゃわっ！？」

び、びっくりした！ちよっと黄昏てるうちに真雪ちゃん お風呂か

ら出てたよ！

ってか真雪ちゃんとこれから暮らすことになったしな・・・

やっぱり俺の能力のこと教えたほうがいいよな・・・

始めの方は普通でも能力教えたらずって行った人多いし・・・

それは俺には辛すぎるんだ・・・

だったら仲良くなる前に俺の事を教えておくんだ・・・

変な人って思われても構わない・・・

もし俺が好きになった人に嫌われたりするよりは遥かにマシだと思
うんだ・・・

初めから嫌ってもらった方が気が楽なんだよ・・・！

真雪ちゃんはどうなのかな・・・

中学のやつらと同じで近寄らないようになる？

友達の振りをして金目当てで近づいてくる？

それとも・・・それとも神父さんや由紀弥さんのように俺を
温かくしてくれる？

・・・大丈夫・・・だよね

うん、心の準備はできた

神父さん・・・俺の心は強くないよ・・・ただ壊れにくくなっただ
けなんだ・・・

「あのさ・・・真雪ちゃん・・・冗談だとか思うだろうけど・・・

聞いてほしいことがある・・・」

「・・・?」

あ、そういや 名前で呼んじゃったな・・・

うーん・・・覚悟してたのになんか拍子抜けだ（前書き）

やばい・・・バトル物書きたい・・・

二次創作書きたい・・・

主人公最強とはいかなくてもある程度強い感じのが書きたい・・・

どうしよう・・・

うーん・・・覚悟してたのになんか拍子抜けだ

まずは結果から話そう

俺の能力は受け入れてもらえた

まあ、どっちかというと よくわかってない・・・という感じだったけど・・・

それと同時に彼女の話も聞いた

なんやら悪の組織のボスの娘とかで・・・
しかも人工的に作られたとかで・・・

厨二病としか思えないから 心を覗かせてもらっただけど・・・マジだった・・・

正直 俺の過去がその辺に落ちてる石ころレベルのひどさだった

暗殺に秀でている者を求めて それが見つからないものだから作ることにしたらしい

幼いころから 武術に暗器に気配の消し方に・・・ 修行の風景は
思い出したくもない

そして人ではなく、兵器として扱われ

ただ人を殺すことにしか使われなかった

俺はこれを見た瞬間に彼女を抱きしめて 「君は人だ」と何度も叫んだ

本当なら彼女が泣いてるはずなのに俺が泣いていた

彼女はわけもわからず 俺を抱きとめてくれた

反対だよな・・・俺が受け止めるはずなのに

と、まあ こんなものを見てしまった俺は彼女が心配で仕方がないわけで・・・
つい彼女に「一緒の高校行く？」と聞いてしまったわけだ

それを言った瞬間 由紀弥さんが待つてましたと言わんばかりに
家にあがりこんできて

「話は聞かせてもらったわ 後のことは私に任せて」などと意味不明な言葉を言つて

書類を残して去って行った

書類には学園の入学手続きとか書いてあって・・・

はあ・・・由紀弥さんはいつのまに用意してたんだろうか・・・

すっごい不思議だ・・・

うーん・・・覚悟してたのになんか拍子抜けだ（後書き）

山乃江学園

私立の学園

中高大とエスカレーター式になっている

ここの大学から医者や政治家になった人が多く、毎年志望者が多い
高校と大学の途中編入試験はとてつもなく難しい事で有名
中学の入試はそれほど難しくはない

全校生徒は例年900 1000人

クラスは一学年に12

ークラス40人くらい

毎年文化祭が大賑わいで有名

文化祭ではミスコンや格闘技大会などがある

寮から通う人と自宅から通う人がいる

寮とは名ばかりでマンションのような作り

寮は大学の隣に男子校が、中学の隣に女子寮がある
寮は中高大統一である

地図的には

女子寮 中学校 高等学校 大学校 男子寮

となっている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0499w/>

俺と彼女と夢物語

2011年10月9日15時04分発行